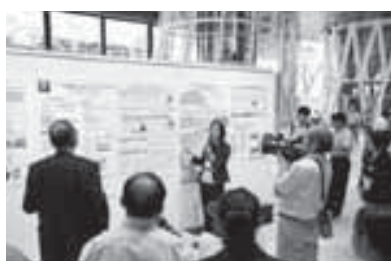


イベントサロン2012

イベント学会第15回研究大会 こころの復興とイベント



CONTENTS

イベントサロン2012 イベント学会 第15回研究大会

・開催概要、開会宣言、来賓挨拶	2
・基調講演	4
・シンポジウム 第一部	6
・シンポジウム 第二部	11
・展示ブース、交流パーティ	14
・口頭発表 ・ポスター発表 ・閉会式	16
事務局からのお知らせ	20



イベントサロン 2012開催

イベント学会では、9月11日(火)・12日(水)の両日、仙台市青葉区の「せんだいメディアテーク」にて、「イベントサロン2012」(第15回研究大会)を実施しました。今回のテーマは～こころの復興とイベント～。被災した市民が困難を乗り越え、新たな目標に向かうために「イベント」が果たす役割、具体的なイベントの手法、事例、プランを提言することを目的に開催しました。

東北エリアでの研究大会は初めての試みであり、後援の皆様のご支援により広く仙台市民へのPRを行いました。また、従来とは異なる公開形式にて実施したことで、当日は予想を上回る来場者(11日約300名/12日約210名)をお迎えし、賑やかなムードの中でイベント学会の活動をアピールしました。



イベントサロン2012(イベント学会第15回研究大会)

テーマ：～こころの復興とイベント～

会場：せんだいメディアテーク 1階オープンスクエア

後援：仙台市、仙台商工会議所、河北新報社、仙台広告業協会

9月11日(火)	10:00～	開 場	受付開始	
	12:00～		シンポジウム会場 受付開始	司会：黒田 典子さん(フリーアナウンサー)
			—ピアノ演奏—	高塚 美奈子さん(宮城学院女子大学非常勤講師)
	13:00～	開 会	開会宣言	野川 春夫 大会実行委員長(順天堂大学教授 イベント学会副会長)
	13:05～		来賓挨拶	武田 均さん 仙台市市民局次長 兼 文化スポーツ部長
	13:10～		基調講演	～都市の復興とイベント～(50分) 堺屋太一 イベント学会会長 —(休憩)10分—
	14:10～		シンポジウム 第一部	「イベントで元気を呼ぶ、人を呼ぶ、ビジネスを呼ぶ」(90分) モデレーター ■木島 明博さん(東北大学総長特別補佐) パネリスト ■志賀野 桂一さん(東北文化学園大学 教授) ■橋本 裕之さん(追手門学院 地域文化創造機構特別教授) ■丸山 富雄さん(仙台大学副学長 兼 大学院スポーツ科学研究科教授) —(休憩)20分—
	16:00～		シンポジウム 第二部	「復興と国際イベント」(60分) モデレーター ■橋爪 紳也さん(大阪府立大学特別教授 イベント学会副会長) パネリスト ■ヨーコ ゼッターランドさん(日本体育協会理事、バルセロナ五輪銅メダリスト) ■福井 昌平さん((株)コミュニケーション・デザイン研究所代表)
	17:30～		交流パーティ	1階クレブスキュールカフェ(会費5,000円、任意参加)
				(17:00終了)

9月12日(水)	10:00～16:30	口頭発表 20題(A会場12/B会場8)
	13:00～13:50	ポスター発表口頭説明 12題
	17:00～	閉会式

開会宣言



野川 春夫

大会実行委員長(順天堂大学教授 イベント学会副会長)

「イベント学会の第15回目の節目となる研究大会を、今回は「イベントサロン2012」という形で開催いたします。18カ月前の東北大震災を受け、我々も何かしなければいけない、どんな形でもいいので復興復旧に手を貸したいという気持ちから、このような会を開催する運びになりました。

イベントには様々な力があります。驚きや発見、感動や興奮など非日常的な空間の中で、人間の心を癒し、励まし、元気づける力がございます。日本の力が非常に弱くなっている今、この会ではイベントの持つ力や機能、役割を一緒に考えていきたいと思います」

と開会宣言をする野川実行委員長。

来賓挨拶



武田 均

仙台市市民局 次長兼文化スポーツ部長

「イベント学会の皆様におかれましては、日頃からイベント学研究や教育支援、産業振興に多大なる貢献をいただいております。「心の復興」と題しまして、ここ仙台的地で本大会が開催されますことは真に意義深いことであり、運営に携わってこられた関係者の皆様に感謝申し上げます。

震災後の大きなイベントとしては、東北六魂祭がございます。去年は仙台市におよそ37万人が訪れ、震災の試練に立ち向かう東北の人々を象徴する祭典となりました。経済効果だけではなく、東北を元気にしたいという人々の気持ちが一つになり、復興支援の気運が大いに盛り上がりました、スポーツの分野では約1万人が仙台国際ハーフマラソン大会に参加しました。文化の分野では、七夕祭り期間に合わせて開催された、荒木飛呂彦原画展 ジョジョ展が大きな反響を呼びました。また今月末には気軽にクラシックを楽しめる、仙台クラシックフェスティバルが開催されます。

本市では、このようなイベントを通して街全体の賑わいを創出するとともに、復興を広くアピールしていきたいと考えております。イベント学会の皆様におかれましては、今後とも本市ひいては全国の都市の活性化にお力添えを賜りますようお願いを申し上げます」

と来賓を代表して、奥山市長からのメッセージを添えてご挨拶をいただいた武田様。



開会前には、高塚美奈子さんのピアノ演奏で来場客をなごやかなムードでお迎えした。



司会を務めていただいた、仙台を中心に活躍するフリーアナウンサー黒田典子さん。



今年は、仙台市民や学生の皆さんにも多数参加していただき、イベント性の高いオープンなスタイルの大会となった。



会場では第2回ジャパンエキスポ「三陸・海の博覧会」のテーマ映像館「三陸の海と人々」の懐かしい映像も上映。



テレビ、新聞など数多くのメディア取材を受け、イベント学会の活動を広くアピールした。

「都市の復興とイベント」



堺屋 太一 イベント学会会長

私は、50年間イベントに携わって参りました。数々の経験を積み、誇るべき業績も反省する点もございました。今日は、私の経験を踏まえ、日本の過去の紹介と現在の分析、それに対する批評、そして最後に東北地方で開くイベントの提案の4つのお話をしたいと思います。

■戦後体制の成功により 一億総中流の幻想を抱いた日本

今の日本の現状は、まさに戦後体制が崩壊した状態だと思います。戦後体制とは、1950年頃、今から60年以上前の政策で生まれました。それには外交コンセプトと経済社会コンセプトの2つがありました。外交は自由主義陣営に属して、経済大国、軍事小国を目指す。経済社会コンセプトは、官僚主導のもとに規格大量生産体制をつくる、でした。この当時は石油が1バレル1ドル、今は110ドルです。安い石油でエネルギーを生産して日本の経済成長に役立ちました。冷戦構造により、西側陣営に属して軍事小国、経済大国を目指すことを可能にしました。また、戦後生まれの人達、私の名付けた団塊の世代が猛烈に増えてきた。この3つの条件が重なり、戦後体制は非常に成功しました。

その結果、官僚主導業界協調体制の日本ができました。官僚の主導に従って、各業界の主要企業が協調してそれを実現する。官僚が大企業を保護していたから終身雇用ができた。終身雇用が約束されたら、将来の昇給に期待を持って働けるため年功賃金ができた。その結果、核家族化が生じて地域社会がなくなりました。

この戦後体制により、日本は規格大量生産に成功しました。自動車や電気製品や光学器械など、規格大量生産のものが世界一になりました。

次には東京一極集中が徹底的になりました。第三には没個性教育が進みました。規格大量生産に適している人材を育成しようと考えた。協調性があり、共通の知識、技能を持っていること。そして、個性と独創性がないことです。この結果、

日本はものすごく規格大量生産が上手になり、一億総中流という幻想を抱いたわけです。

■第三の敗戦を迎えた日本社会

しかし20年ほど前から、石油文明は行き詰まり、冷戦構造は消滅し、日本のコンセプトの前提は崩壊しました。中国やアジア諸国の工業化も進みました。団塊の世代が高齢化し、少子高齢化も進みました。その結果、日本は今や第三の敗戦状態になりました。第一の敗戦は、江戸時代末期に徳川幕府体制が崩壊した時。第二は1940年代、太平洋戦争の敗戦で軍と警察が支配する明治体制が崩れました。そして今、第三の敗戦、戦後日本の崩壊を目の当たりにしています。このことを正確に知ってもらいたいと思います。

経済は長期低迷が続いています。1993年の細川内閣発足時、日本は世界経済の中で18%占めていた。アメリカに次ぐ経済大国として尊敬されていた。今は、半分の9%になった。その間に中国は3%から10%になり、日本を上回る大国になりました。韓国は2%から3%です。アメリカは25%から24%でほとんど変わっていない。日本だけが1人負けしています。さらに、財政破綻、教育の混乱が生じ、決められない政治が長く続いています。国際的地位もご存知の通り下がりました。これは明らかに第三の敗戦現象ではないかと思います。

その真の原因は何か？官僚組織から大企業の組織まで、巨大な組織が退廃していることです。組織が死に至る病に陥っています。巨大組織は機能組織でありながら、共同体化している。これは危険なことです。

組織というのは、ある目的のためにつくられる。しかし、できた組織は組織自体の目的を持つことになる。その結果、組織は構成員の共同体になる。これが今の財政赤字の原因であり、政策硬直化の原因であり、決められない政治の原因とも言えると思います。環境への過剰適応や成功体験への埋没も大問題です。

今や日本の大企業は次々と死に至っています。この死に至

る病に取り憑かれているのは、官僚や霞ヶ関、都道府県にも言えることで、どんどん赤字を積み上げています。

■過去の事例に見る 成功するイベントの秘訣とは

さて、そういうことを前提として、この仙台、東北地方をどうすればいいか？私はやはり、世界中がびっくりするような新しいタイプのイベントをやるべきだと思います。

私は、かつて沖縄開発庁の企画調整課長として勤務し、沖縄の観光開発を手掛けました。この時に、戦後最大の観光プロデューサーと言われた、アラン・フォーバスから、「アトラクティブス＝魅力的なもの」をつくることを教わりました。アトラクティブスとは①ヒストリー、②フィクション、③リズム&テスト、④ガール&ギャンブル、⑤ショッピング、⑥風光明媚、の6つ。この中から3つ揃えるのが観光開発の要点です。6つ揃えようとしたら、個性のないところになってしまうのです。そこで私は、沖縄民謡や沖縄舞踊(リズム&テスト)、ショッピング、そして何よりも美しい海(風光明媚)を宣伝しようという計画を立てました。この話は今度「人を呼ぶ法則」(幻冬舎刊)という本に書きますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。その次に沖縄海洋博覧会を行いました。今では沖縄は年間650万人が訪れる日本一の観光県となり、復帰当時96万人だった人口は140万人になりました。

1970年の日本万国博覧会が成功して、75年の沖縄海洋博も成功した。これを受け、イベントや観光開発ブームが起りましたが、成功したのは1981年の神戸のポートピアぐらいですね。それは、独創性がない「万博の小型」ばかりを開こうとしたからなんです。私も各県からプロデュースの依頼を受けましたが、全部お断りしました。「これでは成功しませんよ」。人を呼ぶためには、明確な意志がなければいけない。何がやりたいのか。これが非常に大事なんです。

90年代には、ジャパンEXPOによって全国で地方博が行われました。この時の問題は、前売券主義です。その地域の文化や経済を振興するためには、その地域以外から人が来てくれないとダメなんです。しかし、1年先の地方博覧会の前売券を東京や大阪の人は買いません。前売券というのは近所の人にしか売れない。前売券は予想入場者の15%以上売ってはいけない鉄則ですが、7割くらい売ってしまう。従って、地域の中だけでお金が流通して、採算は合ったけれども結局地域のためにはならなかった。そんなイベントが多いのです。

■パビリオンは大型電気トラック 世界初の移動式博覧会で復興を加速

そこで、この時代に全く新しいイベントを提案したいと思います。それは移動式のイベント、40フィート級の電気トラックを100台くらい連ねて、それぞれをパビリオンにする。そして、東北地方を中心に10カ所くらい巡回する。電気トラックは6000～7000万円くらいかかります。装飾や設備を加えて約1億円。これを各地でオリンピックと同じ期間の15日間

開催する。例えば仙台、福島、盛岡など東北6県で9カ所と最後は東京。運営費は相当かかります。会場は100台のクルマが止まる場所です。会場の整備、警備、運送、その他は地元で入場料収入でやっていただく。パビリオンとなる電気トラックは、内外企業に出展していただく。夜間の余剰電力で充電して、昼間の電力を使う必要ありません。それでイベントをやる。各会場平均して200万人くらい入ってくれたら、10カ所で2000万人の入場者になりますね。

出展企業は内外の企業に呼び掛けていただき、各社思いの展示、運営、イベント、音楽や踊り、何でも結構です。物販や飲食もあります。入場料が入りますから、地元負担はいらない計画です。これを、震災から5年経った2016年くらいに、世界で初めての移動式博覧会として開催してはいかがでしょうか。

今、私が一番心配しているのは、神戸の時に比べて東北の復興が遅れていることです。それは、いつまでに何かをしなければいけないという目標がないことも1つの原因だと思います。関東大震災の時には復興大博覧会、阪神大震災の時には淡路で国際花と緑の博覧会を行いました。東北でも、5年後にイベントの開催が決まれば、それまでにやらなければいけないというムードになります。

世界で初めての行事ということになると、日本はもちろん、中国や韓国、アジア諸国やアメリカからも大勢の人が見に来るでしょう。日本が第1回を開き、次回から違う国で開かれるようになれば、日本文化の誇りにもなるでしょう。そのためには、まず開催の意志を固めることですね。二番目にはコンセプトをはっきりさせる。三番目には構想を練ること。この3つがあればいいんです。

■観光は知恵で創る ——ハワイの例——

ハワイが世界的な観光地になったのも、1924年に1人のプロデューサーが戦略的な観光振興を進めたことがきっかけです。ハワイアン音楽をつくり、ムームーのファッションをつくり、レイをつくり、アロハシャツをつくり、何もなかったところに、知恵だけで魅力的な楽園を創造しました。今日は一例として移動式博覧会の話をしてきましたが、これからの2日間、イベント学会の議論を通じてぜひ色々とお考えいただきたいと思います。長時間ご静聴ありがとうございました。



イベントで元気を呼ぶ、 人を呼ぶ、 ビジネスを呼ぶ

シンポジウム第一部では、東北エリアでご活躍の大学の先生方にご登壇いただき、復興に向けてイベントができること——その可能性や課題を語り合っていました。



モデレーター 木島 明博

東北大学総長特別補佐

パネリスト

志賀野 桂一

東北文化学園大学教授

橋本 裕之

追手門学院 地域文化創造機構特別教授

丸山 富雄

仙台大学副学長 兼 大学院スポーツ科学研究科教授

木島 まず進行役の私から、ひと言述べさせていただきます。先程の堺屋先生のお話をうかがい、皆さんも元気が出たのではないかと思います。このイベント学会の研究大会で元気をいただいたというのは、まさにイベントの力ではないかと感じました。

私は東京出身ですが、高校生の時に生涯暮らす土地は自然豊かな場所がいいと思い、東北大学に参りました。その後、1996年に念願の研究室が女川できまして、初代教授として赴任しました。自分の大好きな海の生き物の研究ができることに、非常に大きな喜びを感じました。ところが、地震と津

波で研究室の研究機器類やデータを含め、全てを失ってしまったことで、もう一度人生の出直しをしようと思いました。この体験を通じて、人が集まって励ましてくれる、人が集まり1つのテーマで語り合う、こうしたイベントがいかに大事かということを改めて感じております。本日は、そのイベントの専門家であるパネリストの皆様にご意見をいただきながらお話を進めていきたいと思います。

■文化・芸術の力で復興を推進

志賀野 私は40年程イベントを手掛けて、仕掛けをした

り主宰をしたりする立場でありながら、今イベントという言葉に違和感を持つようになりました。3.11という大変な災害を受け、その前後では考え方や価値観が変わった。これを、リチャード・フロリダ氏は「グレートリセット」という言葉で表現している。彼の場合は2008年10月のリーマンショックと言っている。この言葉をタイトルにした本が2010年に出版されています。3.11を人為的につくられたイベントとは違う出来事として広く捉え、私にとってはイベントの範疇に入れてみたいと考えました。それだけ自分のアイデンティティを揺るがす出来事であったということです。

私の所属している「アーツエイド東北」という団体は、文化芸術による復興支援を目指して結成された組織です。神戸を中心に資金提供をいただいている島田誠さんによると、支援は切り花ではいけないと。これは、私が心に深く刻んだ言葉です。

震災後、私も様々なイベントを行ってきましたが、復興のアプローチを、祭の再興から進めて行こうという動きもあります。東北には非常に様々な常在文化があります。他の土地との違いとしては、まさに生活に密着した郷土芸能の宝庫であるということ。これは、そう容易にできるものではありません。調べてみると、コミュニティや生活と一体となっている祭の構造があり、生活再建と一体となっているということが分かってきました。東京一極集中の芸術文化の中で、生活と芸術の一体化というのはこの東北にしかない特徴ではないかと感じています。また、東北の芸術家はほとんどが他に生業を持つ兼業スタイルであるということも、押さえておきたい特徴の一つです。東北の芸能の源流を考えますと、アジアにある芸能

と生活の一体化の中に認めることができるのではないかと。バリ島でも芸術、生活、祈りが一体化している例を見ることができます。

東北六魂祭は、まさに復興の狼煙^{のろし}になったかと思いますが、東北の祭のネットワークの中からこれが生まれた。そして今年は岩手で行い、来年は福島での開催を予定していると聞いております。仙台の七夕は、戦後から長い歴史がありますが、商業化やマンネリ化がありました。それが、大震災が起ったことで祈りの祭として復活したのが昨年だったかと思っています。今年もその意志は継続されております。今まで感じたことのない、人間の絆というものが表われてきているという気がしています。

一方、全国的なイベントに視野を向けると、地域の問題を解消することをねらいとした芸術祭も開かれています。今年の夏、新潟の越後妻有に行ってきました。美しい棚田の風景が残るところですが、過疎と減反などの農業政策により見捨てられつつある。そこを新しい形で再興しようとしているのが「大地の芸術祭」というものです。

最後に、仙台という街を見直してみたいと思います。今年も仙台クラシックフェスティバルが9月28日～30日に行われますが、音楽の力による復興という意味がプラスされていると思います。仙台の人々が、楽都仙台の色々な音楽財産を使って気軽に楽しめる公演が行われています。もう1つ、先週行われた定禅寺ストリート・ジャズフェスティバルがございました。今年は48ステージ、769バンド5200人の演奏家が仙台に集まる、他に類例のない祭になっています。ストリートで楽しむこと、街を回遊して歩くといったことが特徴的なイベントです。私としては、音楽文化によって東北の復興がなされればと願っているところです。

木島 たくさんの事例をご紹介いただきありがとうございます。特に祭、常在文化は東北復興に大きく関わってくるのではないかと感じました。



●モデレーター●

木島 明博 (きじま あきひろ) 東北大学総長特別補佐

1953年3月東京生まれ、1971年東北大学農学部卒業、1981年同大学院農学研究科水産学専攻修了、「シロサケの集団構造に関する遺伝学的解析」で農学博士。1983年高知大学農学部助手、アジ科魚類の集団遺伝学的研究、1987年東北大学農学部助教授、魚類集団の生態的特徴と遺伝的特徴の関係解析。1996年～東北大学農学部附属の女川にある臨海施設の初代教授。交配実験によるエゾアワビの有害遺伝子の推定で日本水産学会論文賞。マナマコの色彩多型と種分化の研究から

アカナマコが別種である可能性を提示。2006年東北大学総長特任補佐・総長室副室長、2008～2010年副学長(教養教育担当)、2010～2012年総長補佐、2008年～高等教育開発推進センター長、学生相談所長、キャリア支援センター長を歴任。2012年～副理事・総長特別補佐。2011年東日本大震災では女川町復興計画策定委員会委員として計画策定に参画、2012年からは文部科学省プロジェクト「東北マリンサイエンス拠点形成事業」の代表機関代表研究者として復興に取り組む。



●パネリスト●

志賀野 桂一

(しがの けいいち)

東北文化学園大学教授

1973年4月仙台市役所入庁、同市企画市民局文化スポーツ部長のほか、宮城大学事業構想学部非常勤講師など教育機関の兼職を経て、2008年4月より現職。

仙台市で行ったアジア音楽祭、演劇祭、仙台国際音楽コンクール、仙台クラシックフェスティバルなど仙台市の文化行政を牽引してきた様々な文化事業・イベントを手がけその中心的役割をはたす。'08年からは、東北大学の川内萩ホールの実業企画・運営に関するほか、地域文化イベントの企画や演出・プロデュース、国内外の観光・地域活性化の事例研究、アートマネジメントや、劇場・音楽ホール、創造都市政策などを研究している。

NPO法人東北PFI・PPP協合理事('08年～)、一般財団法人「アーツエイド東北」代表理事('12年～)、文化経済学会、日本アートマネジメント学会に所属。

■岩手県沿岸部に根付いた民俗芸能の事例 ー鵜鳥神楽の事例ー

橋本 私は、ピンポイントで、岩手県の人口3000人の普代村にある鵜鳥神楽の事例をご紹介します。志賀野先生とは、色々なフォーラムで一緒に考えがかなり共鳴しているので重複する部分もありますが、お許しいただきたいと思います。堺屋先生からご提案いただいた移動式博覧会ですが、実はこの鵜鳥神楽はまさに移動して行っている例ですので、こうした神楽も博覧会に参加できればと思いながらうかがっておりました。

私は4年間盛岡大学に勤務しておりましたので、岩手県の文化財保護審議会委員をしております。専門は民俗芸能ですが、震災以降、甚大な被害を受けた岩手県の沿岸部において、多くの民俗芸能が演じられてきました。それは民俗芸能が地域の人々によって、生き甲斐や喜びとして享受されており、地域に欠かせないものとして深く根付いているからです。地域再建のためには、まずこの芸能を復興させなければいけないという意味で、根源的で重要なものであります。失った用具や装束に対する助成など、様々な形の支援はあるものの、練習の場の確保も必要です。演じる彼らは兼業の芸能者であり、雇用環境の整備もしなければなりません。

私はこの民俗芸能の復興を支援するにあたり、観光振興などにも発展する大きな可能性があると考えています。神楽とは、共同体や個人の生命力を強化するために、祓い、清め、鎮めを行う芸能であり、沿岸部の人々にとって非常に重要な祈りの対象でした。鵜鳥神楽は、普代村に鎮座する鵜鳥神社の獅子頭である権現様を奉じて演じるものです。1月から3月まで廻り神楽という巡行を続けています。年により北廻り、南廻りがあります。各村の人々が神楽の訪れを待ち望み、宿と呼ばれる個人の家や公民館に舞い込むのを、地域の皆さんが集まって待っています。2年に一度しか来ないので、皆さん心から待ち望んでいます。まさに人を呼ぶイベントなのですが、それが地域の中に昔から埋め込まれているということです。

鵜鳥神楽のメンバーも今回の震災で一人亡くなりました。津波で家が流された人もいます。もっと深刻なのは、巡行する沿岸部の村々の宿主さんがいなくなったり、宿だった家が流されたり、大変なことになっています。世界的に見ても100kmも巡行するものはあまりなく、驚異的な上演形態なのですが、そうした文化財が存続の危機にさらされています。文化財を支えるという視点ではなく、宿主を支えてもう一度人が集まる宿をはじめることで、地域が再生する出発点になると思います。

私は今、彼らを支えるために東京都歴史文化財団の事業を活用して、鵜鳥神楽「宿めぐり」実行委員会を組織し、既存の宿を支援したり内陸部に新しい宿を創出したりしています。また、神戸や大阪でスピノフのような形で公演を行い、10月21日には国立民族学博物館での公演も計画しています。彼らが巡行できる場をどのように創出するか、そして、鵜鳥神楽が培ってきた廻り神楽という上演形態を立て直すことが重要だと考えています。

未来形としては、観光客のニーズにも対応する方向性も必要です。そうしないと支えきれない側面もあります。以前志賀野先生と話していたのは、文化芸術や伝統芸能などを一緒に扱い、東北沿岸部を移動していくようなフェスティバルができないかということでした。東北の復興には、伝統的なアートの力が非常に重要だと考えています。

■大学の施設と学生のチカラを活かした復興支援イベント

丸山 私はイベントに関しては門外漢ですが、震災後は被害を受けなかった当大学の施設を貸したり、あるいは主宰して、被災した沿岸部の人達を対象としたスポーツレクリエーションや健康づくりのイベントを多数行いました。その一例として3つのイベントをご紹介します。感想や課題などをお話したいと思います。

まず「2011 東北子ども博」は、宮城と福島の子供達に元気を出してもらおうと開催したイベントです。次に、文科省

の「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の実施が決まり、3 カ月程度の準備期間で開催した支援イベントがあります。三番目は「ウォームアップジャパン in 東北」という派遣されてきたアスリートと一緒に遊ぶことで、子ども達に元気になってもらう事業を行いました。これらは、いずれも国や団体などからの要請で実施したものです。

私なりに、これらの復興支援イベントの成果と課題を考えてみました。成果は、子どもや高齢者など参加者の笑顔と満足感に尽きると思います。ただ、よく考えてみると楽しければいいのか?という疑問も残りました。堺屋先生は楽しさと夢が大事という話をしていましたが、果たして夢は持てたか…。「ウォームアップジャパン in 東北」では、神戸製鋼の元木さんをはじめ5～6人の現役プレーヤーも来てくれました。小学生が中心で150名くらい、陸上競技場でラグビーボール送りリレーなどを一生懸命やっていた。その中には、小中学生のラグビースクールの子どもが来ていた。それで私は、途中でラグビースクールの子ども達と元木さんと呼んで「直々にラグビーを指導して欲しい」とお願いしたところ、元木さんのムードがガラッと変わって、にこやかな顔から真剣な表情でラグビーのパスや当りの練習をしてくれました。思い切って、プログラムの変更をお願いして良かった。楽しいだけでなく、彼らにとってトッププレーヤーに指導を受けたという体験や印象はもの凄いことです。今日は改めて、何か夢を与えられるような体験イベントを行いたいと感じました。

課題としては、復興支援イベントと、突然話が来たものばかりでしたので、まず内発的だったか、自主性があったかという残念ながらお仕着せです。今後はいかに内発的で自主性のあるものにしなければいけないと考えています。地元のニーズとのマッチングも最初は全くありませんでした。今年の「ウォームアップジャパン in 東北」の開催に向けては、非常に気運が高まっています。オリンピックが終わったばかりということもあり、なでしこジャパンやメダリストを呼んで欲しいという声が地元から出ているようです。よくイベントの問題とされる一過性という課題については、この3つのイベントは今年も実施が決定しているので、一過性にならないことを期



●パネリスト●

橋本 裕之

(はしもと ひろゆき)

追手門学院
地域文化創造機構
特別教授

1961年大阪府生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程芸術学(演劇)専攻中退。博士(文学)。国立歴史民俗博物館民俗研究部助手、ミシガン大学日本研究センター客員教授、アイオワ大学人類学部客員准教授、千葉大学文学部教授、盛岡大学文学部教授などを経て、追手門学院地域文化創造機構特別教授・追手門学院大学社会学部教授。専攻は民俗学・演劇学。著書に『演技の精神史——中世芸能の言説と身体』(岩波書店)、『目からウロコの民俗学』(PHP研究所)、『心をそだてる子ども歳時記12か月』(講談社)、『民俗芸能研究という神話』(森話社)など多数。第11回日本民俗学会研究奨励賞(日本民俗学会)、第1回本田安次賞(民俗芸能学会)受賞。2005年のNHK大河ドラマ『義経』の芸能考証を担当した。現在、大阪府市特別参与、岩手県文化財保護審議会委員、岩手県文化芸術振興審議会委員などを務める。

待しています。マネジメント能力が地元還元できたか?という課題については、まだ被災地の人達は自分達の力では無理という答えが返ってきています。今後は、地元での自立とマネジメント能力を還元していかなければいけないと思っています。ところで、昨年から当大学には学生ボランティアの要望がもの凄く来ます。大学のバスで何十人来てくださいと。いいように学生を無償で使っている。お弁当が出るところはまだ好待遇な方です。私も学生と一緒に被災地支援に行き、ああいった体験はめったにできない教育ですが、教育と考えるのか無償で使える労働力なのか、疑問を感じている部分もあり、ボランティアについては少し考えなければいけないとも感じています。

昨年度は国や地域からの予算が付いたり依頼を受けたことで突発的に実施したイベントですが、これからはスタンスを変えながら継続していきたいと思っています。

木島 ありがとうございます。本日はこのシンポジウムのテーマの前に、「こころの復興とイベント」という大きな大会コンセプトがあります。イベントでどのようにこころの復興をするのか?志賀野先生から「震災を忘れるためのイベント」というキーワードが出て、非常に私の心に響きました。震災直後の人間の感情としては、現状を何かで支えたいという気持ちがあると思いますが、志賀野先生いかがでしょうか。

■ イベントが果たす「こころの復興」とは

志賀野 この震災があまりにも悲惨な状況だったので、世の中が「忘れない」というモードだった。しかし、生き残った人達、津波に遭った子ども達は水が怖くてお風呂に入れない。それが、紙芝居や人形劇を見て、心から笑えお風呂に入れるようになったなどの事例をたくさん聞きました。文化芸術というのは、時間を忘れるという力を持っている。人間はリセットしていかなければいけない生き物ですので、そういうことも必要なのかなと感じています。

丸山 スポーツでカラダを動かすことで、辛い気持ちも忘れてリフレッシュする。こころの復興にも、大きな効果を持っていると思います。JOCも熱心にオリンピックの派遣をしていますので、被災地と上手くマッチングを図って、心のサポートを行って欲しいと思っています。

木島 この夏は、ロンドンオリンピックで選手が頑張っている姿を見てずいぶん勇気をいただいたと思います。この部分はイベントの効果の1つとして表われていると思います。心の部分を考えると、橋本先生の神楽によるこころの復興のお考えもお聞きしたいですね。

橋本 鎮魂や供養という意味があることは間違いないと思いますが、何かやっていないと自分がもたないという話をよく聞きます。ある笛の奏者は、笛を吹くことで自分が壊れないようにしていると話していました。仮設住宅で笛を吹いていると、近所の人が「笛吹いてるんだね」と来てくれる。外に向けて表現できるというのも、イベントのチカラだと思うんですね。昔からやっている民俗芸能には安心して笑える、楽しめるという部分を持っています。

木島 私の研究所がある女川では、ある部落が神楽を通して住民の気持ちが強くなり、もう一度地域を興そうという気持ちになったと聞いています。今回は非常に大きな災害だったので、復興するプロセスごとに色々なイベントがあっているのではないかと感じています。特に「グレートリセット」という言葉がありましたが、リセットして次に進むそれぞれの段階、次に移るポイントごとにイベントを考えていただければいいのかなと感じました。

最後に先生方に、将来に向けてもうひとつ言わず頂戴したいと思っています。

■ 復興を加速させるイベントのビジョン

志賀野 先程の元木さんの話にも共通しますが、仙台フィルの復興支援活動などを見ていると、民謡など地元に合わせてプログラムも用意するが、あまり馴染みがないクラシックのプログラムでも、参加者の間で新しい発見や感動を生んだという話を聞いています。プロはプロらしく、プロフェッショナル性をきちんと提示することが、感動や共感につながると改めて感じました。



●パネリスト●

丸山 富雄

(まるやま とみお)

仙台大学副学長 兼
大学院スポーツ科学研究科
教授

1949年東京都生まれ。東京教育大学大学院体育学研究科修了後、仙台大学に赴任。1990年仙台大学教授。専門はスポーツ社会学、地域スポーツ論。

元東北地区大学ラグビー連盟副会長、柴田町スポーツ審議会会長等を歴任。現在、日本体育学会東北支部宮城学会理事、公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員等を務める。

「スポーツ社会学の基礎理論」(不味堂)、「生涯スポーツの理論と実際」(大修館書店)、「現代スポーツ論」(中央法規出版)など著書多数。

橋本 やはりビジネスと呼ぶという、残された部分が非常に重要だと思います。今日は鶴鳥神楽の事例だけをご紹介していますが、NPOを立ち上げることも考えています。職員を非常勤の形で2人雇用できれば、普代村に新しい仕事が生み出せる。地域の伝統芸能を活用できるようなアクティビティをつくって、観光開発なども進めていきたいと考えています。将来的には、地域文化芸術センターのような会場で、外部の観光客の前で上演してお金落ちる仕組みができるといいと思います。被災地支援というと外から人が来てイベントをするという考え方もありますが、内側の内発的なイベントを外から支えることがいかに重要かと考えています。

丸山 私はこれまで何かモヤモヤしたものを感じていました。これは内発的なイベントなのか?と。堺屋先生から、はっきりした意志、ビジョンがないと成功しないとお聞きして、今日は非常にスッキリしました。現状に合ったイベントをやりたいという強い意志を持って、どんなビジョンを持って進めていくのか?それをサポートする形で今後とも活動していきたいと思っています。

木島 最後に、今日は、イベントについて色々な考えを用意してきましたが、堺屋先生のお話で全く発想が変わってきました。一番大きいのは、人の心は変わる。人の心が変わった時々、それぞれの目標、それぞれの企画でイベントを行っていく。それで元気が出る。何か変わるきっかけができる。日常から非日常に変わったところで、自分をもう一度見直す。楽しみながら変わっていけるのではないかな。今までは気づいていなかった、イベントの力というものを勉強させていただきました。

復興と国際イベント



第二部は、橋爪紳也副会長をモデレーターに、ヨーコ ゼッターランドさんと福井昌平さんに、東北復興に向けたスポーツやイベントの可能性、また復興のプロセスを世界に発信する博覧会構想について語り合っていました。

モデレーター 橋爪 紳也 大阪府立大学特別教授 イベント学会副会長

パネリスト ヨーコ ゼッターランド 日本体育協会理事、バルセロナ五輪銅メダリスト
福井 昌平 (株)コミュニケーション・デザイン研究所代表

橋爪 イベント学会では、震災や災害からの復興をテーマにした大会は初めてではなく、2005年に神戸で震災から10年目の節目に年次大会を行いました。その時に、イベント学会として「耐災の日」というものを提案しました。防災や減災という言葉はありますが、災害に耐えることの大切さを議論しました。今回、東北の皆様も災害の直後は非常にご苦勞をされたと思います。神戸でもそうでした。初めの何日間かをいかに過ごすのか？そのためには家庭や公共の備蓄も、賞味期限や使用期限の確認が大事だと。それを「耐災の日」のイベントにしようという提案をしました。

東北の復興はまだこれから始まる段階ですが、世界中から支援をいただいた人達に、いかに災害と復興の経験を伝えるのかも、イベントとして考えていかなければいけないと、

冒頭に申し上げたいと思います。このシンポジウムでは、国際的なイベントとして、災害と復興をどのように考えていくかを議論していきたいと思います。

ゼッターランド 私はアマチュア時代を含め18年間現役を過ごし、今から13年程前に現役を退きました。その後はずっとスポーツに関わり続けたいと思い、オリンピックを経験したオリンピックとして、何か次世代の子ども達に伝える、残すことはできないかと考えてきました。

私の3.11はカナダから帰国した成田空港で体験しました。当初は全く状況が分からず、何か大変な事が起っていると感じるだけでしたが、次第に東北の状況が報道され始めると、アスリートとして何ができるだろうと考えるようになりました。しかし、実際に何をしたらいいのかわからない。日本が大変

■モデレーター■



橋爪 紳也 (はしづめ しんや)
大阪府立大学特別教授
イベント学会副会長

- ・ 1960年 大阪市生まれ。
- ・ 2006年 大阪市立大学都市研究プラザ教授・大阪市立大学院文学研究科教授。
- ・ 2008年 大阪府立大学21世紀科学研究機構特別教授、同大学観光産業戦略研究所所長、大阪市立大学都市研究プラザ特任教授、水辺を活かした街づくりに関心を持つ橋下徹大阪府知事のもとで政策アドバイザー、大阪府特別顧問に就任。
- ・ 2009年「水都大阪2009」プロデューサー。
- ・ 2010年 上海万博大阪館プロデューサー。
- ・ 一般社団法人日本ディスプレイ業団体連合会理事、大阪商工会議所都市再生委員会副委員長、中之島水辺協議会会長、大阪府文化振興会会長ほか兼務。「モダニズムのニッポン」角川選書(2006年)、「ゆく都市くる都市」毎日新聞社(2007年)、『『水都』大阪物語』藤原書店(2010年)など、著書は約50冊。ディスプレイデザイン研究大賞、エネルギーフォーラム賞優秀賞、大阪活力グランプリ特別賞など受賞。

なことになっている時に、どんな形で支えたらいいのか、大きな無力感を持ちました。スポーツがどれだけ人の心を支えることができるのか、半信半疑のまま、それでも現地に行っていることはないか。現地のニーズに極力応えるプログラムはないだろうか、ずいぶん考えて参りました。

私自身が関わった支援活動の1つをご紹介しますと、日本サッカー協会が以前から行っている、夢先生と呼ばれる現役アスリートやOB、OGが小学校を訪問する「夢の教室」というものがございます。このプロジェクトに参加して5年になりますが、昨年震災を受けたときに子ども達を元気づけるソフトがなかったことから、日本体育協会、日本トップリーグ連携機構が横のつながりを持って「夢の教室」のプログラムを元に「笑顔の教室」を立ち上げ、被災地の子ども達に向けた活動を進めてきました。

しかし、被災地はこれまでと全く状況が異なりました。果たして被災していない自分が簡単に子ども達に夢を持って頑張れと言っているのか？初めて被災地に行く前にはかなり迷いました。今でも各地を回り、先日にも気仙沼の在校生7人の小学校に行ってきましたが、実際に行って良かったと感じています。スポーツを通じて夢や目標、生きる力を伝えていい。それを伝えず、他に何を伝えるのか？と、私自身が子ども達から自信を持たせてもらいました。この活動はピンポイントのイベントですが、大きなイベントを開催することが難しい、ややもすると取り残されがちな地域も大事にしないといけないと感じています。



■パネリスト■

ヨーコ ゼッターランド

日本体育協会理事、
バルセロナ五輪銅メダリスト

1969年3月24日、アメリカ生まれ。6才から日本で育つ。

12歳から本格的にバレーボールをはじめ、中学、高校では全日本選手権やアジアジュニア選手権で優勝するなど活躍し、早稲田大学では、チームを関東大学リーグ6部から2部優勝にまで導いた。その後、単身渡米し、アメリカナショナルチームの「トライアウト(入団テスト)」に合格。

全米代表として92年バルセロナ五輪で銅メダルを獲得、96年アトランタ五輪では7位入賞。

97年、ダイエーオレンジアタッカーズ(現 久光製薬スプリングス)とプロ契約し、Vリーグで活躍。チームを三度の日本一に導いた。

99年6月に現役引退。

現在はスポーツキャスターとして、各種メディアへ出演するほか、後進の指導、解説、講演、エッセー執筆など幅広く活動。また、日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)、日本バスケットボールリーグ、日本体育協会の理事を務めるなど、バレーボール以外の分野でも活躍している。

橋爪 一生忘れない出来事であれば、子ども達にとって大事なイベントになると思います。そういったプログラムを元々持っていたことも素晴らしいですね。では福井さんお願いします。

福井 私はイベント学会の仲間と一緒に、政策提言「東北復興博覧会研究会」を進めています。明日は研究成果の中間報告を口頭発表でお話します。この研究会は、3.11の後で、イベント学会の中に「復興イベント研究会」という有志の研究会ができて、私は東北復興に歴史的な事業である博覧会が役に立つのではないかと、復興のスキームの中に戦略的に取り入れることはできないかと感じました。

私は、震災前から今年韓国で行われた麗水の博覧会に出展する日本館のプロデュース業務に関わっていました。その過程の中で震災を受け、出展内容について様々な議論が必要となりました。この時期に「復興イベント研究会」がスタートし、東北の復興にも博覧会のスキームを活かせないかと考えるようになったんですね。

麗水の博覧会について少しご紹介します。金大中元大統領は韓国の全羅南道の出身で、この地域から政治的なトップに立った人は長年いなかった。この方が、全羅南道を国際的にアピールするために国際博をセットアップしたものです。テーマは「生きている海と息づく沿岸」で、我々は3つほど出展プランを考えていました。A案は地球の深海探査と日本の未来創造を示すもの。B案は閉鎖系の内海域水域、瀬戸内海や東京湾の未来を示すもの。C案は森里海の連環、日本の沿岸域の生物の多様性は森里海が連携していることを示すもの。この3つのプランを議論して、結果的にはC案を選び着々と準備を進めていました。そこに震災が起きた。結果的には、森里海の連環のC案を選んで良かったと思っています。

パビリオン内では、日本の美しい森里海をご紹介します。震災が起きたことをお知らせする。メインシアターでは、1人の少年を通じて復興のプロセスを強く訴えながら、最後には日本の先端的な海洋文明の技術や未来プロジェクトを紹介する流れで展開しました。私は、この日本館の在り方を考えながら、東北の復興は日本の復興・再生と、強く実感した次第です。世界各国からいただいた支援についても、この日本館を通じて感謝のメッセージを発信できたと感じています。

橋爪 ヨーコさんも、世界で色々な方から応援を受けられたのではないのでしょうか？

ゼッターランド 海外で活躍するサッカー選手の映像を見て強く感じましたね。本来は公式試合の場で個人的、政治的なメッセージの発信は厳しく規制されています。しかし、国の一大事に直面している日本人選手に対して、連盟や観客、各選手のチームメイトは温かい対応だったと思います。とても嬉しかったですね。

橋爪 お二人に震災後の活動などをうかがいましたが、これからの東北の復興とイベントについて、お考えをうかがいたいと思います。

ゼッターランド 先程も申しあげましたが、スポーツ界としてどんな支援をするべきなのか分らなかったのが正直な感想でした。スポーツ界だけではノウハウが足りない。協力して横の連携をとるべきだと思うんですね。役者さんや音楽家の方と話をしても共通の想いを感じることが少なくありません。もし、イベント学会でスポーツと芸術の橋渡しをしていただけるようなアイデアがあれば、縦割りではなく垣根を飛び越えてできるイベントをぜひ提案していただきたいと感じています。

もう1つ、今日は昼食に全て東北の食材を使ったお弁当をいただきました。スポーツ選手の中には、スーツケースの中に日本の食材を一杯に詰め込んで海外遠征に行く人もいますが、私はある時から一切何も食材を持っていかなくなりました。現地で育ったものは、土地からもらうエネルギーが詰まっている。他国に試合に行くことはアウェーになるわけですが、それも自分のエネルギーにして戦う。パフォーマンスをする上で、それが大事だと感じたからなんです。また、その地を知るためには、地元の料理と一緒に食べることで、言葉以上のコミュニケーションができるとも感じています。

この東北の「食」を日本の文化として海外に向けて発信できると今回強く感じました。ぜひ、東北の「食」の魅力を伝えるイベントも実現していただきたいと思います。

橋爪 復興支援にも、現地の食材を活用することが大事ということですね。スポーツや文化、芸術を横断して考えていく。これは福井さんの東北復興博覧会構想に練られていますが、明日発表されるので、今日は概要の紹介をお願いします。

福井 東北復興に関して、国際社会が強い関心を持っていることが調査を通じて分かりました。私たちは「巨大な自然災害からの持続可能な文明社会の復興と再生」という言葉を使っていますが、巨大災害は文明システムの中で大きな脅威になっています。自然と賢く共生していく社会システムをいかに構築するか、日本の考えを世界にしっかり発信していく。あるいは、自然エネルギーを積極的に活用したグリーンシティのモデルプラン、自然や歴史、伝統を活かした新しい学びの在り方、健康で持続可能な生活スタイルなどが示されつつある。それを、日本政府の復興予算の中で活かし、国際社会に復興のスキームを発信するイベントとして組み立てていく必要があると考えています。

その中で、1つ大きなきっかけになるのが、2015年に仙台で開催が予定されている「国連世界防災会議」ではないかと。巨大な自然災害の記録と記憶を集積させて、復興再生に向けた日本の叡智、努力、実践を、世界で共有できるように広く国連に呼び掛けていくべきではないかと議論しているわけです。この東北復興博覧会構想を、国際社会との共有事業として推進していくために、2つの事業スキームを用意したいと考えています。1つは、東北復興博覧会を岩手、宮城、福島で、日本政府主導により東北の復興プロセスに合わせて開催する。もう1つは、2023年または2024年に、東北復興のビジョンと実践を世界と共有する、国際的な花の国際博覧会として開催する。これを推進するために、オー



■パネリスト■

福井 昌平

(株)コミュニケーション・デザイン研究所代表

1946年、鳥取県生まれ。電気通信大学応用電子工学科中退。企業・都市・地域の未来創造戦略

略の構築と活性化に向けた事業開発に取り組む。CI(コミュニケーション・アイデンティティ)計画の構築と経営戦略としてのコミュニケーション計画の重要性を提唱し、実践的なコンサルティング・サービスを提供している。

国鉄分割民営化総合広報計画(JRのネーミング開発)、全日空の機体デザイン開発プロジェクト、首都高VIシステム開発、恵比寿ガーデンプレイスCI戦略 開発の総合プロデュースの他に、ジャパンEXPO「山陰・夢みなと博覧会」、「北九州博覧祭」の企画事業プロデューサー、愛知万博「愛・地球博」チーフプロデューサー、「平城遷都1300年記念事業」チーフプロデューサー、「麗水国際博」の日本政府出展事業総合支援業務推進プロデューサーなどを歴任。

中心市街地商業活性化アドバイザー、「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム事務局長、葛西臨海環境教育フォーラム理事長、八王子市産業振興アドバイザー、多摩桜プロジェクト特別委員会座長。

ルジャパンで議論をしていくべきではないかと考えています。

橋爪 ただ今のお話は、明日の口頭発表で真髓が語られます。スポーツについては、ワールドゲームもこの構想に含まれているとのことですね。

福井 環境省では「三陸復興国立公園構想」の推進、国交省では復興のための「国営公園構想」の推進などの動きがあります。政策形成と合わせた形で、いろいろなプロジェクトと関係しながら実現に向けて考えていきたいと考えています。ヨーコさんの関係するスポーツも博覧会にカップリングさせる形で事業にできないか、今、研究しているところです。

ゼッターランド カップリングは、アウトドア系でもインドア系でも、様々なスポーツに可能性があると思います。それから、新しいスタジアムや体育館などのハードの整備も、街の防災拠点としていかにして機能を果たすかを踏まえた上で、建設を進めていただきたいですね。スポーツの在り方、社会との関わり方も、復興に向けて色々考えるべきだと、本日は強く感じました。

橋爪 ありがとうございます。震災以来、海外に行くとき全く知らない方から「頑張れよ」と言われるのは、会場の皆様にもご経験のある方が少なくないと思います。感謝の気持ちとともに、次の世代に向けたメッセージの重要性も感じています。海外での災害に対して、次は我々が積極的に支援する。それが震災を経験した日本の使命であると感じています。本日はありがとうございました。

展示ブース発表は6つの団体とイベント学会のブースを出展。参加者はもちろん、オープンスクエア前を通る来館者にも展示内容をアピールした。



●順天堂大学



学生募集およびOBのコミュニティスペース

●政策提言「東北復興博覧会」研究会



発表！東北復興博覧会モデルプラン

●TSP太陽（株）



東北復興に関する自社の実績紹介

●（株）電通



東北六魂祭 2012 盛岡の実施報告



自社の書籍紹介

●（株）乃村工藝社



百二十年、感動とにぎわいを。
—乃村工藝社のこれまでとこれから—

●（株）博報堂



「東北みらいづくり Week with Hitachi」
のケーススタディ



自社の書籍紹介

●イベント学会



イベント学会の活動と書籍紹介



似顔絵コーナー（田畑伴和さん）
2011年11月に似顔絵世界大会にて総合優勝した似顔絵作家・田畑伴和さんの似顔絵コーナー。

交流パーティ.....

せんだいメディアテーク内のクレブスキュールカフェで行った交流パーティ。100名を超える皆様にご参加いただき、パネリストの皆様や地元仙台の参加者とイベント学会会員の新しい交流の場となりました。



「イベント学会として、東北の復興に少しでもお役に立ちたい。仙台の地でイベントサロンを開催させていただいたご関係の皆様に感謝いたします」と挨拶を述べる成田純治イベント学会理事長。

ヨーコ ゼッターランドさんの乾杯のご発声で始まった交流パーティ。



イベント学会恒例の大阪流の中締めで締め括った橋爪紳也副会長。



9月12日(水)の口頭発表では20題の研究成果が発表され、質疑応答では活発な意見交換が行われました。



A会場

第1グループ

座長 越川延明



及川真一 仙台大学大学院 スポーツ科学研究科

Facebookを用いた企画の有効性に関する事例報告
～東日本大震災被災地支援こどもサマーキャンプin秋田～



被災して遊び場を失った子ども達への支援イベントの運営にFacebookを活用した事例を紹介。

柳澤博之 (株)博報堂

イベントによる震災被災地支援の事例報告
～FUKUSHIMA×ASKA Shining Hope Tree～



被災地のこころの復興を促した、13mのクリスマスツリー型イルミネーションの実施概要と今後の可能性を発表。

遠藤秀 (株)電通

東北六魂祭2012 盛岡



盛岡市過去最大の交通規制を要する規模と人出になったという、盛岡での六魂祭の実施状況を報告。

第2グループ

座長 小島敏明



大塚寛樹 フィールアイ(株)

ライブエンタテインメントビジネスのリスクファイナンス



ライブ関連企業における、戦略的な保険の選択とリスクファイナンスを理解した意志決定者の存在の重要性を発表。

宮地克昌 東京観光専門学校 観光サービス科

イベントの実施を組み込んだ授業



専門学校のシラバスにイベントの実施を組み込んだ授業内容と、2つのイベントの事例を紹介。

澤内隆 帝国書院/文教大学

まち歩きイベント組織「六本木探検隊R」実践報告
～まち歩きから復興支援へ～



六本木の観光資産と文化的背景を活かし、ホテルを使ったカルチャーサロンの形で展開するまち歩きイベントの活動を紹介します。

第3グループ

座長 上代圭子



越川延明 日本イベント産業振興協会主任研究員

2012世界トライアスロンシリーズ横浜大会におけるISO 20121実効性評価



国際標準規格を適用したトライアスロン大会の事例を中心に、ISO 20121の有効性と課題を報告。

西利通 SGSジャパン(株)

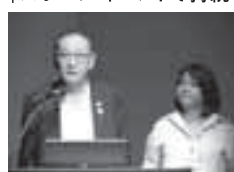
サステナブルイベントマネジメントシステム
～ISO20121の最新動向～



ISO 20121の適用によるイベントの持続可能性と、イベントの質の向上に関する研究を発表。

太田正治 日本イベント産業振興協会

東日本大震災復興支援研究テーマ第2弾
「スポーツ・イベントで持続可能な「真の復興」を！」



スポーツ・イベントによる復興支援の事例と、SNSを活用したソーシャル・キャピタルづくりを提言。
(共同研究者/沖 佳保里(右))

■第4グループ

座長 小林政則



川西太士 (株)博報堂

政策提言「東北復興博覧会」研究会 中間発表
「復興プロセスにおける博覧会事業の意義と役割」



博覧会の意義や役割を歴史的に考察しながら、復興プロセスにおける博覧会の有用性を提言。

金田秀一 (株)アサツー ディ・ケイ

政策提言「東北復興博覧会」研究会 中間発表
「国際博覧会運動のこれからと連携の可能性探求」



東北における国際博覧会開催の可能性を検証した、研究結果の中間報告を発表。

福井昌平 (株)コミュニケーション・デザイン研究所

政策提言「東北復興博覧会」研究会 中間発表
「東北復興博覧会としてのモデルプランの構築」



研究会にて議論を重ねてきた「東北復興博覧会」のモデルプランと、政策提言の実現に向けた活動を紹介。

B会場

■第1グループ

座長 萩裕美子



山谷公基 仙台大学大学院 スポーツ科学研究科

東北地域における企業スポーツの価値創造に向けた取り組みに関する研究
～国民体育大会と企業スポーツの関わりについて～



被災地の企業を中心にヒアリングした調査結果から検証した、企業スポーツの現状と今後への課題を発表。

谷津祥一 順天堂大学

ノルディックウォーキングイベントの現状と今後



地域コミュニティの形成や健康増進など、様々な目的のイベントに活用可能なノルディックウォーキングイベントを紹介。

田中滋 サステナブルデザイン研究所

「復興ロードと地域の活性化」
～復興のシンボルロード自転車専用道を整備し被災地域の活性化を促す～



「Sunrise Way 311」と名付けた自転車専用道の整備による、被災地の持続可能な地域形成のプランを提言。

■第2グループ

座長 岩崎博



鈴木純子 日本リ・ファッション協会

共に或ることに重きを置いたイベント企画の報告



復興支援イベントに関わった人々へのインタビュー結果と、実際に現場で学び取った事例を紹介。

鈴木正規 (株)博報堂

日立 uVALUE CONVENTION 仙台2011 ケーススタディ



震災を機にB2BからB2Cにシフトして開催した企業イベントの事例を紹介。

田部井正次郎 城西国際大学

G-8サミット開催と国立国際会議場の整備を一震災復興と東北の将来的発展のための重要施策



G8サミット誘致による東北の発展の可能性と、大規模な国際会議場の建設の必要性を提言。

■第3グループ

座長 宮地克昌



加藤良子 (株)エンコーポレーション

「イベントにおける救命事例と救命効果」
～あなたの勇気で助かる命がある!～



イベント開催中にバイスタンダーの適切な処置により命を救った5つの事例を紹介。

貝辻正利 神戸大学大学院工学研究科研究員

安心してイベントを楽しんで頂くために
～イベントプロデュースでの安全評価～



イベント企画段階における適切な安全評価の重要性と、安全評価のポイントを解説。



ポスター発表

・口頭説明・

今年は12題のポスター発表がエントリー。
野川春夫実行委員長を座長に
ポスター掲示スペースにて口頭説明を行いました。



● **大栗 梢 順天堂大学**
体育・スポーツ系学部におけるオープンキャンパスの動向



● **岡田 梓 順天堂大学大学院**
全国障害者スポーツ大会の式典イベントの変遷



● **上代 圭子 東京国際大学**
元スポーツ選手における東日本大震災に関するチャリティ活動の現状



● **鈴木 純子 日本リ・ファッション協会**
ソーイングイベントの有効性と復興時における役割



● **田中 滋 サステナブルデザイン研究所**
「自転車道環境整備の機運醸成イベント」
自転車コミュニティの創出と被災地域の活性化を促す自転車フェアの開催



● **譚 文彬 東海大学**
イベント期間中のIT情報サービスの効果に関する研究



● **趙 梓淇 仙台大学大学院**
中国の子どもの遊びと生活時間の世代間比較に関する研究



● **保坂 亮太 順天堂大学**
震災復興におけるダンスイベントの傾向と課題
教育機関に注目して



● **萩 裕美子 東海大学**
スポーツイベントのアルバイトとボランティアの比較検討
—横浜F・マリノスのホームゲームを例として—



● **舟木 泰世 順天堂大学大学院**
総合型地域スポーツクラブを活性化させるクラブ交流イベント
～東京都の地域スポーツクラブ育成支援を事例に～



● **宮野 賢一 順天堂大学大学院**
震災復興に向けた総合型地域スポーツクラブのイベント
～被災4件の活動事例を通じて～



● **山田 亜沙妃 順天堂大学大学院**
国民体育大会における式典イベントの傾向と課題
～21世紀の国民体育大会に着目して～

閉 会 式



2日間のプログラムの最後は、参加者の皆様、実行委員そしてインターンとしてお手伝いいただいた学生と記念撮影。

ボランティアの皆様、ありがとうございました！

大会実行委員会の皆様、そして順天堂大学、仙台大学の
学生の皆様のご協力に心より感謝いたします。

大会実行委員会

委 員 長：野川 春夫（順天堂大学教授）

副委員長：萩 裕美子（東海大学教授）

[実行委員]

荒川 弘毅	猪野 隆秀	内田 なお子	太田 正治	沖 佳保里
加藤 良子	菊地 浩之	北村 明	國田 圭作	小島 敏明
小林 政則	上代 圭子	竹村 公一	蓑島 毅	師岡 文男

インターン

順天堂大学

鷺 周作	菅本 知望	保坂 亮太
松田 速人	宮澤 奈都輝	

仙台大学

安部 翔子	伊藤 健太郎	菊池 香里	齋藤 梨花子
佐藤 浩一	佐藤 文香	高橋 祐也	立野 綾菜
二階堂 志帆	樋口 遙		



撮影協力：スチール／大泉 憲彦 Shin Yotsuba ムービー／梅津 豊

（五十音順：敬称略）

交流イベント

● 金曜サロン(キンサロ)

イベントに携わる様々な分野の皆様と、それに関心をお持ちの学生の皆様などの情報交流の場として定期的に開催しているイベントです。このサロンを通して、新しい人的ネットワークが形成され、参加者の皆様の生活とビジネスがより充実されることを願って開催しております。

【第1部】プレゼンテーション

様々なジャンルをテーマに研究発表や企業プレゼン、事例紹介の場としてお手軽にご利用いただいております。プレゼンをご希望の方はイベント学会事務局までご連絡ください。

【第2部】交流パーティ

プレゼンターと参加者との交流を深め、ビール、ワイン、スナックと共に異世代、異文化、異業種の間人ネットワークを創出するパーティです。

開催日時：毎月最終金曜日 18:30～21:00(年10回程度)

場所：法人会員企業・団体の会議室など

会費：1,000円

● イベントサロン

東京での開催の他、会員のネットワーク化と広がりを図るために大阪や仙台など各地での交流サロンを実施しています。



イベント学研究会

● イベントビジネス研究会(座長:岩崎 博 理事) NEW

イベントの成功をサポートする幅広い分野のビジネス動向や情報について、会員間の意見交換や交流を深めながら議論する研究会を実施していきます。

● 復興イベント研究会(座長:野川 春夫 副会長)

東日本大震災からの「こころの復興」と「経済の復興」に向け、イベントが果たすべき役割を探り、新しいイベントの提言を目指す研究会です。被災された方々と地域の復興にとどまらず、日本の心と経済の復興に寄与するイベントを提言できるよう活動を進めています。

● 中国イベント研究会(座長:宮地 克昌 理事)

発展を続ける中国をはじめ、イベントで国や地域の振興をめざしている新興国などに対し、どのような企画やビジネスが展開できるのか、新しいイベントのニーズを調査・研究する研究会を実施しています。

● まち歩きイベント研究会(座長:小林 政則 理事)

まち歩きで人気の谷根千(谷中・根津・千駄木)を実際に歩きながら、まち歩きイベントについて研究する「歩くサロン(あるサロ)」を開催していきます。

※交流イベント、イベント学研究会の開催日程につきましては、メールニュース、学会Webにて随時お知らせします。



イベント学会入会手続き

1. 入会ご希望の方は、申込書(会員種類別)にご記入の上イベント学会事務局あてにご郵送ください。
申込書は学会Webからダウンロードするか事務局へご請求ください。
2. 申込者については理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金(初年度のみ・準会員は不要)と年会費を指定の口座にお振込みください。
3. 会報誌『イベントロジー』や研究報告書、研究大会、イベント・サロンなどのご案内をお届けします。

イベント学会会費一覧(2012年4月～2013年3月)

会員種類	入会金	年会費	備考
1) 個人会員	5,000	10,000	個人
2) 準会員	なし	2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3) 自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4) 法人会員	(1口) 100,000	(1口) 100,000	企業、団体などの法人

※法人会員は1口以上

(単位:円)



「イベントロジー」
NO.28/2012.Nov

◎発行人:堺屋太一 ◎編集人:小西功一 ◎発行日:2012年11月
◎発行所:イベント学会事務局 〒102-0082東京都千代田区一番町13-7(一番町KGビル3F)
TEL:03-5215-1680 FAX:03-3238-7834 URL:<http://www.eventology.org/>